四四郷談 壹

へ13
196
1

平林
文部
196
1
三十
大川學校藏書
好文堂藏書
昭和十年十月十日手入蔵書

皿皿鄉談序

魚本之學。搆虛之說。稗官以傳于稗官。幻緣化境。追風捕影。其書雖奇而妙。君子不取也。謂之無益於世教。可以廢焉。設夫深寇茶酒之餘。一置之坐右。披卷以讀。乃長夜之睡魔。千秋之愁陣。可祛可排。況博逢明知之士。游談以解懸。類情爲喩。勸懲莫捷於此。昔西方聖人。緣業以諭愚。俗東方曼倩。詼語能諷人主。夫方便之與滑稽。指

旨異而智一揆其言一出于世朝野靡然
從之於是乎稗官之書可施可行是予所
以有此撰也雖然學術之源有淺深而巧
拙判焉智揆之發有遲速而長短見焉夫
生知之學雖聖不敢自處只困學之知琢
磨之功可以到其境矣豈不亦難哉昔嘗
有其人胷蓄天地之秀腹藏萬卷之書片
言隻字可以導前途之迷可以發後學之
癡而不得彰之于廟堂之上徒發惜於翰
墨陽寫世態情致陰懲奸險淫邪自寵其
智以老死于閭巷乃胡元施耐菴是也嗚
呼可惜焉
天朝則不置稗官然稗官自有之在古伊
與部馬養與謝郡司僧景誡等之書固其
所也而其流遠波及閩秀復有勢源華衣
諸篇可謂稗史大拇小說巨擘也傳至數
百年之後愛玩不已聞者讀之讀者好之
於是乎稗官之書可施可行而風侶僥醨

好奇走新、非但愛玩之、乃擬彼倣此、雖作者亦復衆矣、物衆必有滓、解也輕才亦好之、而所著之書、年年數種、筆不停綴、稿不暇易、而其謀刺者、亦唯愛其速、而不嫌其拙、彼則獲其利、猶有餘贏、予則有虛聞、竟無寸功、雖自知其非、勢不得已、如此書、搆思僅數日、弥速滋拙、然書賈猶遲之、而誅求太急、吁賈豎頗有智術、彼之與我、嗜欲鉾盾、與夫不龜手之藥、宋吳興其所用者、又何異焉、古人嘗有言、智之遲速相去、非啻千萬里、軍志有之、兵聞拙速、不聞巧之久矣、速而無巧、久愈拙者也、可見古人善智之拙速、書賈亦能知之矣、豈偶然哉、即書之卷端、

文化十年冬十月　　簑笠陳人解譔

相想和與
明何足特
作遠書疏
数知聞莫
令音信断

紀氏長谷
こゝとなかめつゝ春をゝ
まつゝうゝ春みさのも
かゝゝみそゝこゝそ
あまそとろくゝ子

宋素卿

やまとごゝろ
大和撫子

やまとごゝろ

かぶとの
ちの間の入江ふ
うちなびき
玉藻
うえん
手児名
おもほゆ
山部宿禰
赤人
銚子
盃
天竺法師浄飯
今さふ意酔ふ
きくふ対さうちて
何ぞとかえん
きくのはき楊
納言師頼卿
政田左文太
盃

かんこゝる
戒壇石の
ゆるぎなく
東岡舎 羅文

今日のあこ六

磯山の金剛神

梅ゝの濱りくふ
ゝ
ゝ
ゝ
千住の馬くそ
鶯ノ宮と同ふ
たゞ芋の
親子やちふ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
玄同

素人夫
前妻
片蛇

正未左金
時忠

人魂乃佐青
有公之但獨
相有之兩夜
葉左非思所
念

右萬葉集
第十六怕物
猪三首之一

侍児渡鳥
私卒
荏柄
真吉

きゝれこは
爰ハ
はゝ
蚤の跡
其角

四郷談總目録

○加良縞之巻第壹

第一條　鵲の山ろまを比ふ　唐縞親子ゞ覊旅の横難

第二條　稚巣の楓と名のおふ　継橋ゞ女児の五十日の祝

第三條　山寺の月ゆけるゞ　乞目の畳六ゞ独楽雙陸

○金剛神之巻第二　○第三

第四條　頼光の髭切ゞ擬へ　里見の重宝纖月隹刀

第五條　賢女の謀ゞ恥を雪ぐ　私卒丁七ゞ力乞の山居

第六條　栄華を宿の嵐ゞ駭　徙橋宗郷ゞ良別の涙雨

○阿琳衣之巻第四

第七條　烏夜ゞ迷ふ兎ゞ撲　天目洲助ゞ再杖の草枕

第八條　夢を占して仇ゞ撃　烈女鮮衣ゞ嗟嘆の霧海

第九條　崇ゆよりて妻を喪ふ　萬春良雄ゞ帰郷の後悔

○弊迹四之巻第五

第十條　功ゞ讓り恩ゞ報ふ　節婦義僕ゞ入江の水咫

第十一條　分鏡ゞ再び合　舊妻両女ゞ名簿の郷導

○加討四之巻第六○第七○第八

第十二條　主の為ゞ赤縄を待ぶ　侍児渡鳥ゞ百夜の密語

第十三條　姪を佐て美玉を沈る　天目法印ゞ夜川の殺禊

第十四條　三ゝび駭して怨ゞ報ふ　正禾時忠ゞ逢途の戯謔

第十五條　喪悪ゞ改て善ゞ報く　孝女鈌四ゞ法會の功徳

四四郷談巻一　八

○著作堂編述出像國字小説略目次　群玉堂藏版

椿説弓張月　前編　後編　續編　拾遺　殘編　全部三十冊

六條判官為義の八男冠者為朝父の勘當を蒙て九州へ下り菊地原田の人々と威伏して鎮西八郎と称せらるゝ比保元の乱に敗て九州へ下り菊地原田の人々と威伏して軍衆と用ひら也に無念の敗軍に猶大敵をうゝ後八丈島へのがれて新院の御味方ふかくして軍衆と用ひら支と引旧記によろ為朝一代の行狀いとゝかゝ琉球國へ渡海するの珍説とゝべて故尽しがたく美談多く凡よし本の随一たるべし

開卷驚奇俠客傳　初編分卷八冊　貳編五冊　三編五冊　四編五冊　五編五冊

此書は南朝の忠臣新田楠の一族等零落の後猶志をとげまゝて足利の非義を恨南帝補佐のこゝろゝをやつし堪難辛苦をうの物語又補氏の一奇女姑摩姫幼年にして古今に比稀なる才智勇烈男子にまさる所業九六姫の仙術もゝて巻中の奇談未發の新趣向多くありて実に開巻て驚奇とのふ外題ふかくゝ作者の自讃といふべくゝ古より史よむ人の遺憾とする南朝忠臣の外傳なれば一と快き傳記たるべし

四天王剿盗異録　前編五冊　後編五冊

皿皿郷談巻之一

東都　曲亭馬琴編演

第壹　鷄の山ろれよ比ふ

唐縞親子ぶ覊旅の横難

萬松院足利義晴公將軍ゝる時武家第一の執權は右京大夫高國と左京大夫晴元ゝりこれを京都の両管領といひゝり。抑高國は式部大夫政春ゞ子ゝる比前管領澄元朝臣養ひとりゝく継嗣ゐせり又晴元は前管領澄元朝臣の嫡子なり。共に將軍の一族ゐて細谷川のきゝ廣く威稜四海に洋溢して富貴はおのゞゝ並立ぎ高國晴元確執ゝ合戦ゝぶくゝりゝぶ京摂一日も静ゝる時ゝ享禄四年夏六月摂津國天王寺の戦ひゐ高國ゝくゝうち負ゝ尼崎のほとりゐて忽地自殺ゝりゝ。頼究ゝゐ兵士ホ軽ゝるもゝりて落るもゝりておのゞゝゐなりゝけりかくゝ後

晴元ハ權を三好ニ奪れて三宅の城を追落され丹波路ニ呻吟嵯峨野ハ
躰ニ近江の浮田ニ漂泊して在ども永祿のそゝめ比
旅宿ハ病て身ハ京都の管領ハ絶ハ高國ハ死ハ
愁ニ生殘るも家を喪ハ狗のごく彼此ニ彷徨て飯ごハあさうかるしそぶ中ハ
唐縞素二郎宗卿といふものありけりこれ
ゑふど異朝明の弘治の比朱縞と呼れ人のみて本貫ハ鄞人なり後柏原
天皇の御宇永正のころゆやゆりん船人ニ便船して我皇國ニ投化して姓名を
改めて宋素卿と名告て躰て華洛ニ居り
元来文字ハ暗くふゞ口才あれりのなるゞ政元おり〳〵歎待て〳〵をりく吹嘘
ちうりしうゞ素卿ハ遂ハ望足りて將軍義澄公ハたゞ〳〵ちうりてハて妻ハ
娶りて男児ひとり産せり。その子ハ今の素二郎ゝかゝて歳逝物換りく

義澄の嫡男義晴時ニ十才ハ軍ハ任ぜられ政元の嫡子高國管領ハ
世ハ新〳〵うりあれど累年の兵乱ニ華洛ハいとく荒果て公私の財用足ざれ
高國ハきく思慮をめぐらし防長豊筑の守護ハ大内義興ハ相譚して
市舶を渡さんとて宋素卿ニ書翰を齎し明國ハ遣ニ程ハ義興も亦宗設と
いふの僧使者として齊一彼処ハ赴せしに其ハ私素卿ハ先ざちて唐山寧波府ハ
著〳〵素卿ハ世ハ〳〵ねてこゝとて前後を爭へどもいふゞひ色ありく竊ハ
府吏ニ賂して先ハ渇をもとめて稍憤ハ散〳〵ハ素卿ハ唐山ニ
さ〳〵ハ妻もあり一子なりて嘗ハ日本を生ると今の妻子ニ泣まつ〳〵別離の
涙ぬりかゝて彼ハいふぶなりけんとゝ〳〵ハ便宜ハあわぶく
ゆふ。又ハいりゞ〳〵ハ〳〵ハ〳〵やとものびくハその在所をゝぶゆるハ
前妻ハ大ゝるゝね物ゝひ身まつて〳〵その子ハいく落魄て如此〳〵の処ニ

居りこて次第をること長くもわふびと告るのあり。素卿は竊に驚びてその夜さり招れよせ。それぞれちふまいやすーて面つきをれせ。親と子ぶ名告次第をつまて合まて忍びもあくぞりろ長よ。こんなんけど声をつ長ね。是や水無川の杜鵑血を吐くもひ今更よかくとうるれ母のつ。子の憂つ次通宵子ぶ喞ろ親いる尼姨捨山の月ちふ心。慰めかまつ。子ひとつの秋ぞそふ袖の露。ちとと彼処へ行ぐ。和と漢の拾子みいづ疎ぬあふ極ども。ちの地ぬい留りがこ。その故ぬ固様ふくと。委細ぬ説ちふせをも人みやまをちん。緯立地ぶ露顕て親子ぶろ共獄舎ぬ繋ぶ。その顛末ぬ責問ぶ。素卿は朱縞とらひ。名ぶく。弘治明の孝宗の年号の比遠く東へ走りぶ。緯遂みかくぶ。加旃迹を暗ー名を変く。高國ぶ使節と稱ー。来著の刻同伴と前後を爭ふて府を開し。府吏ぬ賂ふて至るぬ咫尺ーなりし。その罪尤軽ぶとて素卿をさふ。

その子さ人首次刎ら是ことを悲うれ。ぶ。ぶ足後柏原天皇の大永三年。明の武宗皇帝の嘉靖二年のるなりぶかくしろぶ大内ぬ使者宗設ぬ旁ちて功ふく。辛ーて帰りまふ。緯の跡を演ーふぶ直ぬ華洛くやめえろり。さとぶ日本て儲ーた。素卿ぶ妻。その子素二郎ぬ。ぶてなりとちりるぶ。生別れぶ哀ーぬ。ぶ常の風ぶ便りて世ぬなくるり人のうくやく。ぬ胸のことぶれて。天ぶ叫び地ぶ倒ぶ泣ぶり外ぶもぶ。ぬ体歎ぬ母親ぶ病ぶらふことを三とせあまり。ぶさ人黄泉の客ぬうりね。此ぶ素二郎十九歳。ぶ世ぶ芸藝ぬるるのるふ孫ぶ。ぶとぶぬ親の子ぶるぶと。高國ぶ奉ぶことを扶持ー。亡母の忌果ぶる比ぬ出ーて近習と。父ぶ姓氏を表りて。唐縞素二郎宗卿と名告ぶ。ぬ素二郎ぬ大ぶとぶるね恩ぶ感ぶ義ぶ仕りて。他事ぬ仕ーるぶ。高國ぶ。ぶ不便ぬ思ひぶ。みぶらぬれぬ媒妁ー。潜代の家臣

天目隼人滋孝が女児名を庄塊と呼ぶと妻せーふ明年より三とせぶりにて。
女の子呼ぶと挙はく。長女を唐草。次を紅皿と名づけり。寔ま人間の吉凶
禍福ハ糾る縄の如ー。素二郎ハ出奴ーて。おのゞ隨意挙動ハ物足らざりし。
ものざりしよ。天王寺の軍敗れて。高國尼崎ま自害せーヨ。岳父天目隼人ハ
さゝろう義ょ仕り恥をもるりのハ主の首をとらせじとそ。追ひまる敵と血戰し
金彼此ま敗れまて。かゝまび唐縞素二郎ハ。ようゝく高國恩顧のりのゝ。
戰場ふ扈徒ーもづゝ。主の自殺外ま見ゝく。生てかへゝんとハ思ハざりし。
元来勇ゆるりのまふ祢ぶ。ものさゝる戰ひハ要せず。小髮ょ殘殘と員さる
のゝ崩まて逃る雜兵ホ誘引まて。不思議ふ存命ようけまども。大将既ホ
敗れて残党ま逐ょ全ふ巣を破られー狩場の雉他林を求ゞ有繋ま
羞て京へ帰ふまと山城國伏見の里ふ幽る住所を下て妻と女児ども居ふ。

とゝまる行ふ。素二郎が金瘡ハ愈ふ。いつまでゝ斷くきゝん。行ふ
宿まふまと。緣てゝ今ょ。よ。ふべの落もゝ松の。湾ょ漂ふ
術ふ。ふ月日を送ふ。京ふ祿四年ハ暮ふ暮て明ふ天文ふ改ふ
春ょ夏去ふ。秋ふ殘ふ。ものなりね素二郎ハ六年以来ふ。官領の
出仕人ょ。ふ。富ふ。ものふ祢ども。かゝ。瀧ホ。ふ今日ホ及び。貯祿ふ
ふくものふねを一年ものの僑居ホ大ふ用ひ果ーふ。坐て食ふ山ふ
糧竭煙絶ふ及ひふ。後悔其処ょ立ふ。ふ。母の親族妻の陰忘ホ
去歳の夏尼崎ま食ふ死ーふ。ふ。滝合ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふ。良人の嘆息ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
さのふ。ふ。ふ。今の世ハ華洛ふ。東國ホ名ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

両部神道の修験者にて。年来略河内を居とせしが。華洛の兵乱疎なし
さて。東國へ赴たるに。そや四年といふに。まだ平定の音耗なかれども。今い
里見に身を倚ると。風の便りに安房の里見にあらんと尋ねて
ゆく情なく。待さ侍べうもあらばこそ。こゝもん身も豫てより知るべきなりと
加以ところに一個の兄もあり。生れ時より乳の下に洲濱のごとき痣あり。
名を洲之助と唱れしが。恥しさに縁故を委細に告ぎし。ところ兄を紹介
より。雙陸。目交四一半にて。あそびを事として。年に似ぬ賭ごとに行末の
浅を失ふと度々諫れば。父は怒り。母は歎きそりて共に苛く教訓しるとも
いとあざとくていふひもし。遂に博戯に起るといふ。長さ五尺推量らる。嗚呼の
癖者に嗣して家を汚さんより。見ぬ方ぞ楽。後やとくさぐと敦圉
なる父の一徹理なれば母は只うち歎くのみ。渠と法師にせばやとて。

その夜一個の老僕に豫てより法縁あり。番場の法華堂へ落し遣しあり。
父は有繋に追しもいとぞこの時兄は年十三なれども懲りもせず行童に
蘭若に在ぬ。ところ兄の心やきにて竟に出家を切に遂に慶に僅に三年
にて法華堂を逐電し。往方知れざるに母は歎くに悲はそりて積に癖に
血暈と只病著の数をひろ世に成人となりぬ。ひとつとなる十五の秋なりし
されば又兄洲之助は近江の蘭若を奔出より年とも駭ぬれど在所は今に
定なるべし。年ごろ隨に真の道に立入り人なくなる仏ぞ。
なひ。親の神夢の導にて。いざ環りもあらんとて。
同胞の子どもなるに叔父なれば。憑にとうらぶやらそれかくもあ
ばこそ餓こんとぞもなし。里見の叔父を尋ねて安房へ赴たるに。
ちなれ。素二郎ゆくゆく点検程を経て親類より。近に他人と俗はいとそれ

を支ふる時のうち。分の憂とおもふ憑しれば親族よりとりの比我も天目法師に
識ざるよあく孫ども。東國のことのを聞く定うらねふ聚止まり。里見といふ
況れ邑。今の國主は義堯とて。安房上総いくさ〻うり。下総半國伐従く
特に射めく大緒矢の城下なれば彼人を索はる伝のありさまとて。ゆくこの日より。
紀行の用意しつ。今茲五つと三つなる唐草紅皿を椎乃く笠よ杖よと呉竹の
伏見の里を立去りしは十月の上澣ろり。東海道は今も合戦隙邑と聞えし
ゆく近江路よ出呉淀路よ入り岐岨山まくてけばいとゞ露ゆれ小篠原夜よ宿り。
日よ出むいそぐ旅ろはあく孫ども。盤纏手ちよ歩も進こそ。その月の十三日よ上野
國甘樂郡。荒芽山へ徑をとくねば仁田山里ちく来ぬこの時の街道は今の世
いふ古道なれば。驛路も間遐くて。異ゆくゆくよ難我ゆふ越路の敵軍攻
来まりと。路ゆく人よ駭されて。ゆりとるきいゆくもあくば。素二郎は遠しく。

唐草を背ふ負ひ片埦は紅皿を懐よかれ抱き。跡よ跟た前ゆそちく。歩の
運びとらそぐれよ。現この邊只今合戦ありけるゆや。弓箭械器ゆど。途の
ゆくてふ捨るあり。又梅楯の造荒ゆど。幾條ゆ遠てあり。唐草目をゆく
これをこんて。彼とりてゆくといふ。かゆる折ゆも。ゆのどけれ侭子を賜しかゆく。父は
かの造荒両三枝ゆとりつそ。その一枝を唐草が髪髮よ挿。又一枝を紅皿が
ゆんとるとんとせんとて。おのゞ挿ぢよきる行ふいそぐとすれど。その日れそぐて
天は果敢ゆく暮て。そゆや黄昏ふ。ありにゆり。浩処よ耳辺よ一声の炮音く行
こそあれ人群うって崩れ来ると。吐嗟とぞうりんくれば差弱男女数一百人。
あくゆの軍兵ゆ逐ゆつ。あるゆ投く逃来ゆ。ゆうち回ゆくゆ難く。
疾走りゆくとて素二郎は足ゆ信して喘く先ゆ。ゆち四五町ぞうり走回ゆ。
ゆどめて背後をゆうゆ片埦は逃迷ふ荘客ゆふ抑留せゆゆて逐ゆ

寂念
五五郎

唐嶋素二郎
途ふ婦幼を失ふ
素二郎
かち草

遥に後を見れば喚くほども疲せぞその影ぞ見もつくるはしるけれども忙然として立在折軍兵四五騎追蒐まつ造花を挿所せしへ仁田山の孫人あるらん彼生拘きと覚ゆるふ素二郎ちちくてこそ慌くて一言も句の向答もはせず金を横ぎりて逃走るを並松の陰とりて又一個の武者衝と出て矢庭に素二郎を拳倒し背ち滾流る唐草を小腋に抱て跡をもとどめて走去る素二郎は不意を打れて忽地に目眩て愛時黒白を別ざるに息吻くし身体起し。四下をえるを日は暮果て十三日の月鮮るり當下一個の弱僧此地のものとおぼしき株に尻をかけてをり旅人心持はいかゆぞやと問ふに素二郎信とせず。什麼ちん僧は何処の人ぞと問へば莞爾とうち咲ひて曰はく題目寺の同宿。ゆとりある領主の滅亡に遭ぶ手徳羅の街とうりねよりて寄くの乱妨を避んるひとりあるまでまつる折いと痛しい和殿の横難生死不定に打倒され。

負ふ子さへとられぬる為侍とうんぬる泥塗とかくは浮法進ぬ世とはいふに素二郎親を更め原来聖は命の親なり某は故ありて上総のくに赴く老くあるはこの地の兵乱に妻と稚きりのを失ひ今又さへ五才ばかりの女児を奪ひさられぬえ来行客にて緯の始末はよくもきらびされば敵はみも身方はもかくばらはりのるふねよるどそ又かくまでふ苛ひめふあふやあらん。縁故はもひとのくとらふに法師はうち忘れさおりるるも理りく豫てはやりや及びるん。當郡仁田山の領主とやうはは安房の里見の一族に藏人舎連とは世武士なり武略に長ける大将なるを越後の國主長尾殿に惜くとられん。合戦数度に及ひ敵は名まある猛将にて軍兵も十倍をるれば戦に毎に身方に損あり。かくて又越路の敵軍よりとると豫くはめえ一ば仁田の里見舎連ぬ主従必死とうひ決め當城に分内陜しにて敵をらけんと

要害の地ゐ拵らへんとて。三百餘騎を引率し。城を去ること。二十餘町砥沢川を前に當つて。題目寺ゐ楯籠て且く防戦ふ扨ては安房より援兵も来ば前後に敵と組ん死ばやと。さゝば最期をいさぎよく。既ゐ射竭んの今はとや勝て出られ敵と組ん死ばやと。さゝば最期をいさぎよく。主従貪過去帳に姓名を書送りて折々祖師の忌るれば仏の忌ゆに飾そ。さる造花をまゐ取く各これを服に挿されば壽永の梶原が二度の駈ゐ入らんとも武勇ハいかでか劣べき挿花の花も仏縁あり来世の先鋒又ぜんぜと異口同音ゐ題目を数十遍唱へて大門を推開て唱て殺さく出撃まつ勝まとも戦ひ。大将舎連ぬ〻さらるり。二百餘騎ハ討死し。残る百騎に足ざるべし。さらばこの今和殿を見ば造花を挿さり此故ゐこそ仁田山の落合と疑れく。妻子と取られひるその花を掻遣捨てゐく往方を索ゐ人。その人ゐあらざれば命失ゐ生ぜんに至て。ある苦と真成ゐ。

綽の本末説さらとれば素二郎小膝を礙と敲。さはよ絶さらざれば獅子りのが愛ざるまゐく送る花を拾ひ〻ひとれさ人挿花ゐる故この殃危を釀〻ひとらひつ花をぬとりて三段に折く遥に投棄り。ゐん僧ゐ値偶せざるこの疑ひん解ざらん法弟をもとにる人妻と子どもを索ゐて後に蘭若へ参りて再生の歎びをまさえと。とらん法師ハ身を起。とれハ出家のことゆゑ。るでゐ報と俟りのるん。ゐく妻子を索さ子人といふ云家ゐいまゞ後〻ゞ流前まゝんそこの法師の眉間へ〻さと立ゐ苦と一声叫びあんさ撞し倒まく気絶け。素二郎これと驚た聯〻ゐ久れども敵ハ只瓦の音遠くゆきて殿の人の叫声と原来寄まる同退ゐど後人と法衣ゐそ住地妻と子ども立ゐ去る迄ハこれもこの地を去ゐ去〻ん身の落命ハ歎くゐも痛〻ひんこの法師心操老実に慈善の人とんえゐゞ過世いるる悪報ゐそかゐん非命ゐ後ん。

幽霊得脱頓生菩提弥陀仏〳〵と唱へて。死骸を要時伏拝て蹠を旋じ貝冠の音をたゝく走りて妻と女児を素てゝ冬の夜なれば月冴て其明きこと白晝の如し。ときに仏武者と呼ばれし。揖児を小脇に抱て北を望て走るあり。とゝつぐ女児を疑ひ怪。とゝくべ此二も猶豫せば恐ぶ如くに逐ふ。天にも走る叢雲に月を隠して朦朧たり折こそよけれと刃を引抜て声を掛けて後方より。鎧の高紐を手と抓て仰さまに引倒せば起んとするを乗懸て。懸てりて刀を振てゝ胸のあたりを丁と衝く。彼伏られて件の武者をたゞ一刀に死ぬ。偖て軍兵数十騎彼脱をるとぼりて驀直に競て懸勢ひ。當ぶらもあふぎれ素二郎慌忙て轉輾て泣稚児を搦取て。脊へ負あげ。命を限りと逃まれば蓬〻なる。と馬を飛て透間もなく追蒐る。敵の騎馬武者つゞく素肌もろも背に揖児を負くべきやうに仮るべく。あるべき前へ進め

ども。ひとり処にをるゝとゝえて。進退既に究る折中黒の旗翻翻と山風に吹靡く。前面に林の中より一隊の軍馬きり出現て吐とばかりしべ素二郎に。これをこそゆく先もかくの如く。数百の軍兵元満されば。ま束ねて死に就んのみ已なるべくと。ひとりどち天を仰さうち歎くに前なる殿の軍兵と素二郎に目をとゞめ只今逐ふる寄手の武者に会釈もなく突て懸るとゝ寄手の軍兵にありひしがれ。援兵に来はるをこそ。かるべしとやそひ人。遭を引く人。捨敵打ぬ逃るに。當下こゝの軍兵に五六町追蒐て徐くと引つゝ。さに叢雲忽地月を吐く。甲夜なれば明るければ先陣の軍兵に。路傍に立て素二郎が背に揖児をつらくゝて悲るゝとゝいひて指て密語て。一人躍て刈を離れ縁由を告ぐ。けん。摠大将と。ぶ。きぶ馬の足掻をとゞめ。ふるゝ亦ちの如く。満面に笑ぶ。馬より下りて諸軍兵に隊伍を

乱さて兜を脱ぐ蹲踞しつゝ。彼件の大将ハ恭しく素二郎にうち對ひけるが
そもじ其の見氣を見て名告らざれば疑ひしたるが。某ハ安房の老臣正木弾正
時綱なり越路の大軍襲ひ来ると聞き難義に及びなんとし。曩に仁田山殿舎連
よりその告あり時綱を以て浦田殿狸見義の仰を兼。先鋒をうけたまわりて。
一軍に将として日ならず進發せしかども途遠ければその期に到り合ず先陣の
けらは及ばず舎連討死したまいぬと惜むもかたはありぬ。加之幼少きし嬢
姫らへの御事とかく直に題目寺へ軍馬をよせて敵の兵を追崩し。かの
おん往方を索る折姫の傅継橋梁右濤の職之ハ既に数ヶ処の深瘡を負て道
次に倒れてありしが呼び活くこれに問ば舎連主従討死の為体をつぶさに。
その身から深瘡を負て心ならずも姫君を敵に奪ひとらるゝよしと告終て
末期の一句のみて忽地に縡切ぬ。舎連ぬしの討死ハ今更に悔るも甲斐なし。

り姫君をとり復さずバ怠慢の罪脱れがたし敵を引とらへ。ひとりみんと
三方へ部して。おん往方を索るに勝誇たる北軍を追ちらしそのまゝにて姫君を
救ひ奉りしこそ幸なれ。柳和殿ハ何人ぞ。仁田山殿の御内にあらずと面を
しるよしなき人なり名告玉へと慇懃に演けれバ素二郎疑惑て忙しく答ふ
それ擇児を枉あやし月を燭まちめて見れバこれなる女児ハあらぬ也て年の程も
四ツ五ツにはなしけなる姫君なりしがそのいふと仰天し惑て心を推鎮めて
つくと案ずるに年紀さへよく似たるに折から月ハ雲隠れしておぼろくと
見えまがふ前後に敵をうけしが。なほ眼さへ暗なりて擇たりのを捷と見
とめざりし。そのまゝ負て走りしハこれうたがふ純しれとさつふ些も暁さとらず
臍を噬のと悔ても術なし。とぞろりかくしく姫君ハ正木に逅らして跪死ずいた
せんずる方ぎねども。たづね救ひまいらせんの薄命告るも面なきからら某

原ハ京家の浪人管領高國ニ仕る唐橋素二郎宗卿といふりのゝ
主君滅亡のゝち伏見ニ閑居し。其処ニ住ひ上総なる妻帳を
めそふ此度妻と女兒を携乃彼処を投く赴く行よ。ふ至りて不憶兵乱ふ
逐迷されて妻と子どもの往方知らぬ。ちゞめをいくば箇様
箇様終を説ば如此〳〵と題目寺の法師ゝの彼ゞ狂死の為体其処
よりまもなく妻子をゝ。寄手の軍兵を突伏ゝ。ゝゝと姫をとり復世。
一五一十を物語るに時編も亦ゝち驚れ原来和殿ハ旅ハて妻と子どもを
失われ。より。つゞ姫君ゝゝゝふぶも。危窮を救ひまのひ〳〵和殿のうへハ
ざふ。と痛〳〵とゝのゞら後悔ふふ。ちゞ抑この姫うへハ船姫と稱ゝうして。
實ハ義尭のもん子。ゝゝゝふ舎連ね。ふぶも一個もゝりしゝ去年殿りふ
乞ゝされ養女として仁田の城へ迎ゝれゝゝとれ継橋梁左衛門職之る。

影の傳を著られ。ふ彼ふ。ゝ。ふ。ぐ。討死。姫ハ一旦敵の為ニ擒ふせられるも
よゝ。り和殿の助ゝゝゝ。ゝゝて吾们。ゝふる影を拝ゝゝれ。かゝまで功あふ
人の妻子ゝゝれ又索ひて酬ふ。ん北兵大軍ゝゝゝゝふゝも既ニ英気ゝ折ま
ゝゝゝ今胄ゝゝゝ退ゝゝゝ。ゝゝ易ゝゝゝひゝと叮嚀ふ慰めはゝ。ゝ
仔候ゝを。て敵の形勢を窺ゝふ果して時編ゝ量ゝゝ違ゝゝ北軍ハ
ゝも遠く退ゝゝゝと注進ゝゝゝゝゝゝ行ふ天ハ明ゝゝゝ行ふ正未弾正
時編ハ更ふ軍兵紙部ゝて素二郎ゝ妻と子どもを素ゝさせ又里見舎連
主従の亡骸をゝゝ。歛めて題目寺へ葬ゝ。昨夕素二郎を嗚呼ゝ。ゝ
却流矢ニ命ゝ隕ゝ。彼法師ゝゝゝゝ。ゝゝ。素二郎像ゝ告ゝ
その死骸ゝ葬ゝゝとて時編ゝれを展換ゝ。ゝゝゝも嘆息ゝ。
此僧ハ継橋梁左衛門ゝゝ家子ゝゝ梁太郎法師寂念ゝ渠ハ生得臆病ゝ。

甚嗚呼のものゝふ。劔難の相あるとゝ。主君の孟ところのすべと。父も母も早く亡ひ給ふ。年十八九の比出家させ。この春當所へ遣はしとゝ。題目寺の所化ともゝと豫く。さゞ時ゝ卜筮祝相も極めと。是不便の後焉ゝと。只ゝ遍身嘆ゝ。縛の縁を住持に告。父梁右衛門墓に合しと。これをも厚く葬りぬ。かゝしゝども。片城と唐草紅皿が存亡定るべふ。敵に擒にあるゝふ。乱軍の中に殺されんと人もいひ我も思ふ。素二郎ますゝ憂悶え有繁人目ばつほしさぶとぼさね涙いとゞ。ゝく。詫ゝわさ人ゝえゝゝ。時綱ゝを慰めて禍福ゝ未定まる。所主なし。一旦妻子を失ふとも。恙なくあらんあ。環會日のあるべふ。やゝ。ゝろあり。獲ざりしあも。ゝなくして。まゝ入ゝとあり。先某とゝ。共に南総へ赴ゝ。和殿ゝ投ゝゆく処ゝ。ゝ主君の采地ゝ。ゝば是彼ゝのゝ。ゝ祥

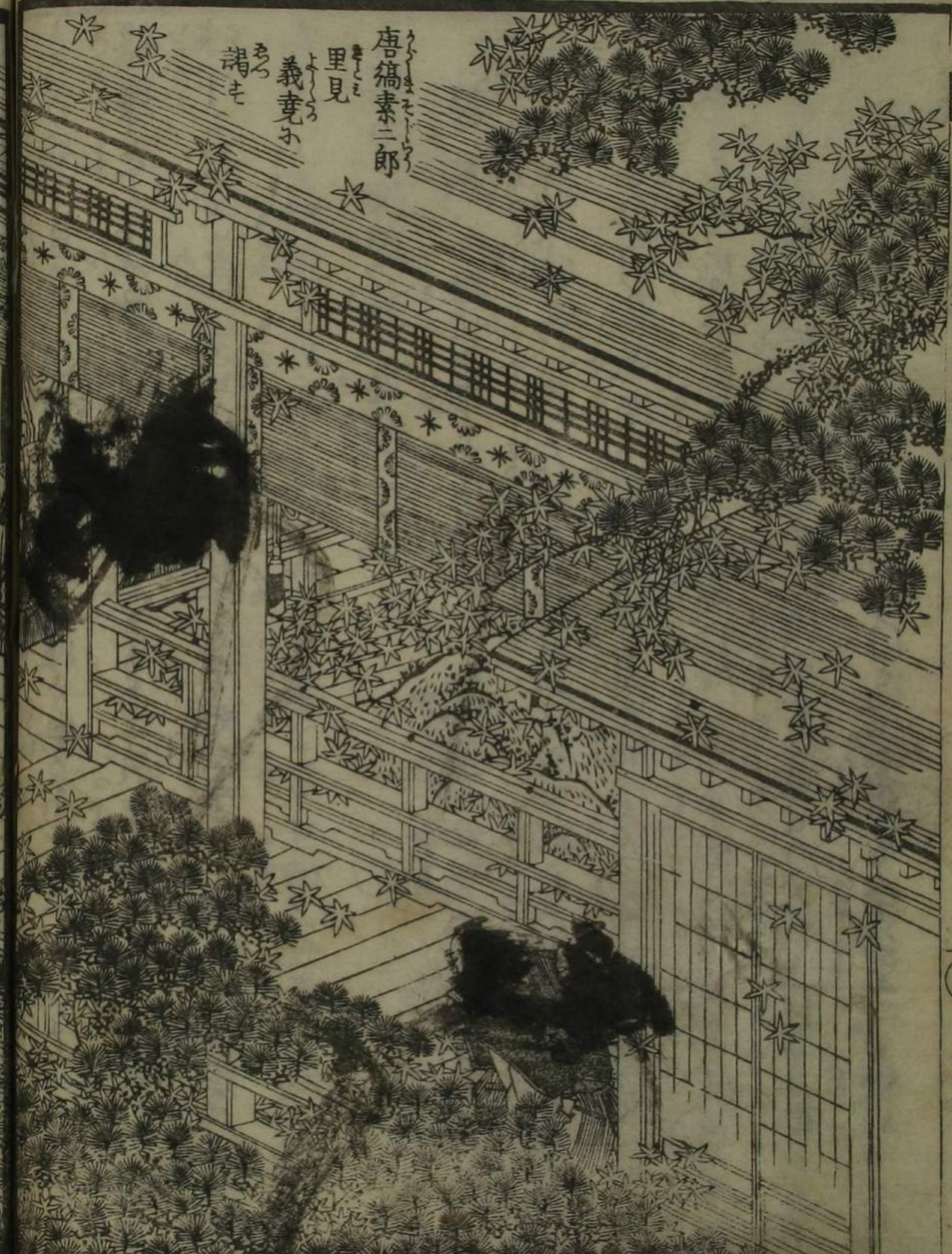
とゝのねべ。且ゝ。ゝ捨ゝと。道理を述ゝ勸ゝゆゝ。素二郎ゝ。ゝと。盤瀾ゝ。ゝ旅ゝゝ。この地は由ゝ。ゝ正朱と共に上総へ赴ゝ天目法印ゝ。ゝ。又せんゝ。ゝもあゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝ異議ゝ。領諾ゝゝ。時綱も亦これを歎び。姫ゝ。輿に乗せ進ゝ。素二郎ゝ。ゝ上総ゝ。浦田の城へ帰陣せり。

第貳

稚葉の楓と名は負ふ　継橋が女児の五十日の祝

里見兵部大輔義堯ハ左馬介義豊の子ゝ。乳名ハ源四郎。當初上総の廳南ゝゝ。廳南の四郎御曹司と稱ゝ。父の箕裘ゝ。武威ゝゝ盛はして房総二ケ國の外下総半國を領し。四十八城を麾ゝ。ゝ。その弟ハ上総畔蒜郡。末里の浦田ゝ在城せり。大九上総十一郡のそゝ中ゝ。畔蒜郡と指ゝ所。今ハ望陀ゝ隷ぬゝ。

里見
みさと姫
かつまた素三郎
正未時綱


唐鴉素三郎
里見
義竟が
謂き

地圖を攷るに。彼畔蒜の一郡は海上周淮の[illegible]を左右にして埴生望陀市原の三郡に頭を挾む地方細小なりしが。右の五郡に合されて今は定られぬるぞ。さて件の四十八ケ城は上総に廿六城あり。大田太勝浦。小濱万木。鴻臺矢嶽の六ケ城はさべく夷灘郡にあり。榎本勝見一宮帆丘鶴の五ケ城は長柄郡にあり。東鑑。土氣の両城は山邊郡の内にあり。窪田真里谷。椎津の三城は望陀郡の内にあり。佐貫造海の両城は天羽郡にあり。池和田八幡御所の両城は市原郡にあり。聽南金谷人の両城はさるのちに埴生郡にあり。鳴土の城は武射郡にあり。来里の城は畔蒜郡にあり。倭武二十四ケ城にあり。二ケ所は逸して詳らかにせず。義堯義弘の時土地を開たる上総を一圓領するに及べくこれを是里見に隷とらふ當時の威勢如此なるべしさるに里見の老臣正禾彈正時綱は船姫を護まゐらせ日ごとに

来里へ凱陣して義堯に見えし上野仁田山落城のゝ舍連主従討死の屍体京家の浪人唐橋素二郎が姫を救ひ奉りあげしに義堯これを聞あへず。下さびに舍連の討死をいと惜み一トさびに鵜姫の悲なるを飲びて父子駕を對面あり。そのち野の女房を冊けて奥さまに養ひまゐらせこの姫君は年長て義堯のもん弟義弘の嫡男なり。松王丸の内室なりふ鵜姫のゝこの下に話ゝ。却説里見義堯の此度唐橋素二郎が仁田の里に不慮の績その賞なくはあるべからずとて。次の日正禾彈正に素二郎を浦田の城へ召登さして。饗饌の義あり路費として金錢許多賜つ旅泊不便のあるべき出ひと叮嚀に仰せらるる素二郎は唯〻として祿物を戴つて。駕に旅宿へ退出る。是より素二郎は盤纏のさゝみなりしが毎日は彼此を徘徊して天目法印が宿所を尋るまこれとそのゝ紛〻

あまりのゆゑゆゑし難く。正未時綱が第へ赴き件のよし告しらべ時綱且く
うち案じつれ苟も當家棟梁の臣たるをもて民数帳を主て主君の地位
あるとあは道俗男女の姓名を大槩に記憶されども天目法印浄弁といふ
修験者にいまだその名を聞ことなし。さられ和殿の公卿ゆゑ穿鑿と逐べ
とそよふ憑しく心ろさて旬日あまりを経て素二郎又治来りて時綱ぞ
對面。天目法印がゆゑ房総いくばくぞ下総葛飾のほとりまで。羽撥を延
弾ず隈なく穿鑿ちつるとどもちの人ねゆゑ悔ぞあるんぞ。足ふ
とて村長ぞ言受書をうんせーぶ。素二郎呂を失ひ。まだ時綱が法ふね。
誠心を欺ひゆえ彼修験者につぶ妻の平九叔父でのひーぶ。この上総に在
よしに所ゆゑ侍ゆるのを風を追ひ影を捕るとふ喩ゆも似てゆべ索難ふも
その故ありとれるのゆゑひよとれば。妻と子どもが世にありしも憑しーげる

ちふのを彼ぞは既に世を去ねと今又ちひ決んぞ世間ひよく形ゑしけ
よりして刀を乗法師ゆる外ゆるぞと他のるくいくば時綱も諸共に嘆息
為命をうち嘆くのあまりさあるあよしに理ろるれど可惜しれ壮士が齢三十ふ
至らずして果門とるることあるんや和殿の武勇を船姫とり復せ
推量ら加以京都の官領家ゆ仕へしれ數度の合戦ゆあひみん
額に残る大刀痕ゆて事実ぞとも著しいねる比つぶ君もこのを宣ひて
旅人唐綿素二郎に憑しーげるる壮佼るり渠が世代の功を賞して召使ふ
るくゆゑども家に左典厩綫豊以来他郷より来る浪人を新に雇ふ
こと禁ぜれば予が意ゆも任せぐ。と惜ちはべきりのと宣ハせーとも
ありよりてこれ和殿のゆに漢ぐ元依しるるとあら孫ども妻子あるりへと
ゆけば。今まぞ黙止り存亡不定の妻ゆり子。これらの故ふ世を捨て

法師になれんとまでいひけれど。それは遥なることとあり。他の名蹟を継せず。
なほ里見の家臣となりて三百貫の主たるべし。その名蹟は別家にあらば。
和殿にも豫て告たる継橋梁右衛門職之が遺跡なり。渠は鵜姫に傅きて
去歳のその月上野へ赴きつ。此度北越の大軍と戦ひて討死し。又その子
梁太郎は出家せしが。是さへ戦場にて不慮に命を隕せしかば。遺りし者は
女児のみ。これはその名を鮮衣と喚れて。稚きより奥ざまに給事せる者なるを
上野へ赴くに及びて。さらば継橋職之は當家相伝の家臣にして忠義に死されし
ものなれば。殿のおん憐みいと深く。塔を擇てその子に妻せ。遺領を相続させよと
時綱仰を承られども。いまだその人を獲ず。されば頃者和殿の進退にとりては
隨分に功に誇らず能を賣ず。老実なる人とおぼし。妻子のなきぞ幸ひ。縦
他苗を冒すを厭ふとも。時綱則媒妁して継橋氏の女婿にせん。縡一朝の議に

あるべきことにても強ては勧めず。みづから思念しての上と叮嚀に説示せば。
素二郎頓に回答なく。つくづくと案ずるに。これは今般の鵜なりし人の秋助に
あらざりせば身をおく所絶てなし。正しく上総にと仕へたる。彼天目法印すら
世にありて身をおくによしなし。況や人を屠ること芥の如きを見てど乱軍の中に
あそ別れし妻と女児なり。この世中では逢がたからん。あにはからず唐草が鵜姫
なりとして越の軍兵逐蒐に来て矢庭にこれを打倒し。女児が襲ひかかるを見
これは一旦死なんとせしに彼法師が直に呼活勤めざれば。これか危なかるべし
さは辛くして生ながらも彼流矢がつひに身に受なば忽地黄泉の客となりなん。
あるはまたこれを助けて流矢に命を隕せし法師の女弟を妻にせよ。その親の
跡を続げ。といふことも又不思議の縁なりとの再生の恩ある家を続て世に
なき人々の菩提を弔へば神も憐み仏もさらに導きたまへ。世に在とも又なく

なりねども。女房女児が過去未来のあるべきことわびと腹裏をて
尋思し。竟尓と笑く席次進めかくへ不肖の某が忠臣の後とせられ
その女児をりて妻しるべ。有がさかべ幸へ。前妻世をあり。後妻なも
異心を存せを君の為あい忠を竭し家のあるあい我を守てるべく先霊の祀を
絶じとやくのこ他ゆもなくんと誓言を演べ志しべ時獨大に歎びて當坐の
領覚いるべひあり。あるべ徘の赴をゆえあげて。形のべ計ふひあり。十五左右と
行ゆてよといあて素二郎雀躍して旅宿に退て俟やべ老臣正未が汲引をるとべ。
緯速ゆとてのひ義竟許容しまして廼唐橋素二郎が継橋梁右衛門職ゆ
[illegible]養子にるさ素二郎がこの日より継橋素太夫と改名さ。さ忌
べ。果て後主君竟お見参。養父の本領安堵して。その夜鮮衣と婚姻せり。
鮮衣今茲十九歳。くるくるね縹致るるお心操亦貞實るれば入聟とし

素太夫を為べ。為べ侮らべ真成ゆ存留ほべ。その年より有ゆて月ごろお
るしるべ玉とやるお女の子を産ねこのとれ秋の季ゆとべ軈て楓と名づけ。五十日
百日の壽ゆとて朋輩を召聚へ酒のひして抜ぶ折俄頃ゆ御教書到来しべ。
ひるべ素太夫を殿の近習ゆるれしべ浦田の城中に参とるべ日るべ其延へ
後徒をゆくとあいざるべ只顧人も羨むまでお光ゆ僥倖おぞあるる。

第三

山寺の月お抛けるお　乞目置六ゆ獨樂雙陸

上総國望陀郡姉个崎の磯山ゆ金剛寺とやる寺刹のりけり。むべしを
由緒ある加藍るれども。数度の兵火ゆ荒果て礎のみぞ餘波る茅屋お
路を埋へ狐兎へ棲を沼るり。そゆ中お四足門のみ斜ゆ残りて剥るる
丹塗の金剛神蜘蛛の網ゆ絨られて只一體ぞ立ゆ。太古の造佛師。
司馬達ゆ他るるは里老が口碑ゆ伝へて祈はべかるべ應験ありと人々

をきくらあれど里遠離る敗寺ハ途のゆくての凄〻て糸涓殊ゑ不仮るれば信ぜるりのもゆるりしゐ天文七八年の間なりけん件の金剛神夜ゆく里へ出或ハ貧ゑ田主が為ゐ畑を打水を漑し或ハ壮佼をそゝのかして相撲をとゝしりゆうんど頻ゐ風声ちゑまどゝもゝれゑとゝふりのもゆく実ゑ〻ゝね怪談ゆゑとゝ冷笑ふりの又ゑゝりちゑゆゑ此比乞目の異六と渾名せられ嗚呼の癖者ありゝりその本貫ハ定ゆゑゝゑ羊耒関の八州を彼此となく徘徊して去歳ゆゝり上総へ流ゑゆゑゝ定めゝゆゑ活業ゑゑゝ同氣相求ゆゝ地方の破落戸を集合つ博戯双六をのゝ車とせりゆゑゝちの徒ハ本事ゑおゝれ舌を養彦袁道ゐも似ゝるゝ技ゑ長てハおのゝゝら敵を悔りて城を落され朝ゐ富ども夕ゐ貧く腑を噬ゝちゝゝ又この比もゝく夜ゆく敗軍ちゝく物弾りなくゝゝれゝゝゝゝ宿借る倩ゐゑゑゝゝ彼金剛寺の敗門ハ

寝処と定めゝ晝ハ終日睡りて暮せゝ夜ハ癖つゝゝいも行ゝれゝゝ月さえ殊ゑ明りけゝゝゝ石畳ゐ坐を占ゝ塊をりて石ゐ目をりゝ懐より笛をゝゝ生て。ゝとゝ双陸ーて笑ひ楽む拍ゝゝ敵ゐゑゝ技ゑゝゝゝいく狂もなく真堀ゝく友ゐゝゝゝゝゝゝゝ伸ゆる拳を捺ていゝゝゝ後方をゝ久れゝゝ身長一丈ゝりゑる赤ゐゑる悪男子背ゐゑてほゝ笑をり大膽無敵の異宣六ゑれども項ゝゝくゝと寒ゝゝえゝく肌膚忽地粟起ゝゝ逃ゝも騒ゝゝ佶ゝゝく細戯ゝゝゝと叱ゝゝゝゝ又茫然とゝゝち咲ゝく。ゝのゝゝ叱ゝゝゝゝく夜ゝゝ世ゐ宿貸ゝゝゝゝ其許のゐゝりのゐりゝゝゐ敵ゐゐゝんとゝゝのゝゝいひ法楽ゝゝゝ對へゝ畳六呵ゝくゝとゝち笑ひ友ほゝき折なれゝゝ二王ゝも十王でも敵ゐゐゝゐ嘯ゝ移ゝ物ゐゝ勝負ハ労して功ゐ。ゝゝゝゝゝゝ我ゝ

鐵鈔一文の賽銭なれども投與はりのごとく。裸形でアラむ和主なれば接とも
栄ある博戯ハ要せど。何をぞると沈吟ど。吁ありくと顧を拊和主り
輸あらぐ。吾倘ふ膂力を投ずるとき和主ふ輸さんとの筒を進らせん
といふ和ちぐくうち点ぶ。そハ一時奥のあるなり。汝一番これふ贏べ一ケ羊
膂力を得させん。三遍つづけて贏ふ。ぶ羊膂力をたりさせんぶ贏も
さのごく。三番贏べ三ケ羊汝ユ角をとりぶべいかそ及ぶ。笑捧ふ
入りて既ユ勝負を争ひぐ。神変自在の金剛神も活馬の目ハ抜とぶ。
枝ユ長さ体畳六ふ重五朱三と乞目を接て。続けく三遍輸ぐべ。賭され
ぶとく覿面ふ。そを膂力ハ投ずと。債くれくひを掻ハかれい異議ユ及び
かぶ乞ぞ隨ふ三とせぐ間大力の人ふ一ケさせん。ちうとも汝その力ユ乗て
ちうちく非道の挙動せぐ命も其ハ処ユ絶ぐべ。志を改めて牛馬ふ等しく

汝とあるとも人ぶとくする活業せよ。努怠めと説喩ー。かれ消さぶとく
ありふりり畳六奇異のそひして井垣のあるさハ向上まぶ金剛神ハ内ふ
ありこれを敲けべ形のごく木像ゆて異ぶとと色夢ぶとくべその物あり。
現ぶとそくべその人なー。まぐ試ふ傷ぶる戒壇石ハ推動さふゆらくと
動揺ぬこハ不思議やとそれを忘さく。肩ふ乗さるふいと軽ー。奇ぶる
ぶれハかう四五十人ぐ膂力を沿ぶるむ巳の和泉親衡も朝夷義秀もいでら
ぶるとふまきとあぶんふある教しと肩ふせー。巨石をゆちぶ投棄て力足ハ
踏ぶ巳その暁ふ麓へ下りて。ぱくぐとありふ。件の二王ハ羊ふ木偶ふ
物の馮さ化さるく真の神でるそれぐそ。雙陸ふ果敢ぶく輸られぶ。ぶれを
渠ぐ真貞ある教訓ふ威さるて活業ハ物ふとも。賣買のうくゆと疎く
農業ハ迂遠ー。相撲ハとりて世を渡くぐそれ初のゆとぐそれども。四十八ふ

一つまも志ゝ行び其を做ゝて月日を送り彼三年の期をゝさび顧の巫み水の酒ゝ河童み育一その甲斐ゝ〻ん。つゞ刃非力る故ゝ袴垂ゝ跡を追続ね。今かゝるゝて世間ゝ。もゝゝと色の色。この勢ひ引剥ゝゝゝ狐ゝる銭を獲べ玉を炙で桂を薪。綾ゝ帳ゝ錦を袖左右ゝ美人を挾て酒壺ぐ浴せんも事みるものゝ隨ゝぐ。されべとて俄ゝ事ゝ越さゝ守ゝ守ゝゝ。おりゝ〻ゝに挿ゝがゝん要てとゝ。密ゝゝ髪を乱ゝ面を塗ゝ異形のゝのゝ打扮ゝ。夜ゝ彼此ゝ立頭ゝ物ゝ人と又ゝとゝ走蒐ゝ含て投或ゝ打臥抓拗ゝ。金銭衣裳を剥ゝゝ己ゝ物を取ゝゝ易ゝ。さゝ戦國の習俗ゝ。士農工商の差別ゝ。志ゝゝのゝ。をゝく武藝ゝ做ひて。腕を扼ゝの最ゝく。入ゝゝも出ゝゝ。をゝく用心せゝゝゝゝれゝ。この畳六ゝ撞見ゝの小相撲ゝゝゝ里人ゝ

さゝゝゝ。撃手剣拳法の師範ゝゝゝゝて。肩をゝゝし臂を張ゝも半死半生ゝ。拳悩され。阿容ゝゝとして懐ゝゝゝ。物を遍ゝゝゝ牧聽さゝゝ己ゝゝゝ。袴を脱ぎ衣を脱ぎ。大刀ゝゝ奪れ命助ゝゝゝゝゝゝ。赤裸ゝてかゝゝゝもあり。ゝゝれゝゝもゝの強盗を畳六ゝゝゝゝ。彼ゝ山ゝる金剛神ゝ。夜ゝく生ゝ人を逐ひ。引剥をゝゝゝ。これよりて剥ゝゝれゝる里人ゝ一隊ゝゝて罵了狂ひ盗賊ゝゝ。さもゝてゝゝゝ山の妖二王ゝ引剥ゝゝゝゝ安ゝゝゝゝかの庚申講の集淺ゝゝゝゝゝ奪れゝゝ。ゝゝゝゝ垢ゝゝ晴衣布ゝ。巳時ゝゝ。ゝゝ肌衣ゝ剥ゝゝ。損ゝて恥辱を獲のゝゝゝ抓れゝゝ骨や挫げゝん撲傷疵りてこの比ゝ鍬柄ゝゝゝ。ゝゝ今ゝの貢ゝゝと白。彼古木偶を打砕き。薪ゝて肌浄き。夜を凌ぎべゝゝて熟ゝる

腸の冷ようはふん。彼もゆけ。されば西くんと。冨〻〻敬動を里老仏梅林
いつぞ。ゆ。ことわぶん彼敬山の金剛神ら畑を打水汲〻〻人のあ
助をまされ或ハ壮佼をそのひて相撲をとらぶ。ふとこそ伸つれ。
神体仏像の霊あるよ〻ハしよう〻人と神佛が強盗〻て凡夫を刺とう
ゆ〻し。宗旨の法論ゆも兼ふど。祖父の代より夜話みも絶〻〻ばざる
ことぞし。勤ゆる所行をて。灵仏の崇ゆ。あ〻ら人の亂ハ碧ゆん。
只在の隨所〻。守の威光を藉より外ば。さハおもハぶや。と説喩せば。
衆皆有理。と應ず。ゆ。ゆ。退きね。

大川堂